

ここ 20 年、日本のオリエンテーリング界を引っ張ってきたとも言える日本学連。しかしその学連も加盟員の減少に悩まされて存亡の危機に立っている。そんな日本学連の実態を、現在の幹事長が告白する。

日本学連概論

米本路憲 (東北大学 4 年)

日本学生オリエンテーリング連盟
幹事長

第 1 回:

加盟員減少問題について

皆さん、始めまして、東北大学オリエンテーリング部 4 年、現在日本学生オリエンテーリング連盟幹事長を務めさせていただいております。米本と申します。以後、お見知りおきをよろしくお願い致します。今回は編集部の方に無理を言って、O・マガジンに日本学連の抱える諸問題について解説させていただくことになりました。

日本学連の無くなる日

—加盟員数問題

現在の日本学連の加盟員数は何人であるかご存知でしょうか？ 最も多いとき（1992 年）で 2,800 人を数えた日本学連も現在では 1,200 人程度になってしまいました。つまり、最盛期に比べて 40%位になってしまったということです。このあおりを受けてか、かつては 1,500 人を数えたインカレの参加者数もいまや 800 人（矢板）。こちらは最盛期の 50% くらいの値ですが、「人が集まる」はずの関東地区でこの程度の人数しか集まらないというのはかなり深刻です。このままだと、近い将来、参加者は 500 人を切ることになり、既成マップでの開催を余儀なくされます。

「既成マップだろうと競技者のレベルが高ければいい」という意見も有り得ますが、「日本」「選手権」という呼称が付いている大会で新しくマップを作れないというのはほんとにもさびしい話です。最近日本学連ではインカレの存続のための様々な案が議論されてい

ます。例えば今年度から選手権の部の競技者人数が男女とも 3 分の 2 になりました（男子 90 人→60 人、女子 60 人→40 人）。

又、平成 17（2005）年度には、現在の日程（秋にショートディスタンス、春にクラシカルディスタンス+リレー）を変更します（秋にロングディスタンス、冬にミドルディスタンス（現在のショート）+リレー）。

他にも運営組織のトップを固定しようとか、様々な議論が為されています。しかし、これは「加盟員（厳密に言えばインカレ参加者）が増えればこんな事をしなくていい」であり、最近のインカレに関する問題はやはり「人が足りない」事によります。

それにしても、（どこかのクラブ員数ではなく、日本全国の）加盟員数が最盛期の 50% を切ると言うのは異常な話だと思います。いくら「学生がクラブ離れしている」とはいえ、例えば、野球などは 80% くらいになったとどこかの新聞で見ました。「オリエンテーリングと野球は違う」、とおっしゃる方もいるでしょうが、せめて 65~70% 位に抑えられたはずでは、と個人的には思うのです。ましてや「世界選手権を目前に控え」「アウトドアスポーツは興隆している」はずで、因みに 80% の場合加盟員数は 2,200 人、65~70% でも 1,800~1,950 人位になります。ずいぶん受ける印象が違いますね。また、インカレの参加者数は 1,200 人くらいになります。いずれも現在の加盟員数の 1.5 倍くらいに相当します。これは大きい。

こう考えると、やはり斯くの如き惨状を招いているのは、新勧活動の拙さにあるのでは、と考えられるのです。自分の周りで、気合を入れて新勧をした大学は人数を増やし、そうでない大学は人数を減らしたと事実があったことも、この考え方の基になりました。

日本学連の対策

—新勧アンケートの実施

そのように考えて、自分は加盟員増加のための第一歩として「新勧活動に対するアンケート」を実施しました。

設問は以下の通り。

1. 大学名
2. 新勧実績（人数）
3. 実績の評価（新勧は成功と言えるか）
4. オリエンテーリングをどう紹介したか、詳しく
5. 自分のクラブの活動をどう紹介したか、詳しく
6. 今回の新勧で成功、失敗した点
7. その他、気づいたこと
8. 日本学連に対する要望意見等があれば詳しく。

以上のアンケートを東大大会を目処に行い、回答を回収しました。副幹事長である石関（千葉大 3 年）がこれらを集計して分析を行ったので、引用します（『』は米本の解説）。

1. アンケート参加率

アンケート提出校/H13 年度全加盟・準加盟校数：36 校/65 校
アンケート回収率：55.4%

新勧実績（獲得推定人数）

北東：22 名~25 名
アンケート回収率：80.0%（4/5 校）
今年の獲得推定人数/H13 年度新規学連登録者（前年比）：
22~25 名/31 名（71.0%~80.6%）
* 以下もこのような形で集計します。

北信越：39 名~44 名
アンケート回収率：80.0%（4/5 校）
前年比：95.7%~117.4%
（22 名~27 名/23 名）

* 信州大学、富山大学の昨年のデータが活動報告書に記載されていなかったため、前年比を計算する際、除外しました。

関東：116 名~132 名
アンケート回収率：44.4%（16/36 校）
前年比：83.5%~94.1%（71 名~80 名/85 名）

* 東京大学、筑波大学、立教大学、茨城大学の 4 校は、昨年度のデータが記載されていなかったため除外しました。

東海：35 名
アンケート回収率 100%（3/3 校）
前年比：205.9%（35 名/17 名）

関西：31～36名
アンケート回収率 57.1% (8/14校)
前年比：57.4%～66.7% (31名～36名 / 54名)

中九四 (山口大学)：13名
アンケート回収率：50% (1/2校)
前年比：—

『はっきり言ってしまえば今年度の新歓も失敗してしまった、と思います。自分の無力を恥じ入る他なく無念であります。しかし、「存亡の危機に立ち向か合を入れた」東海学連が実績を倍に増やしており、新歓の方法しだいではまだまだ伸びる余地があるといえると思います。』

新歓の評価

成功と回答した大学：17大学
失敗と回答した大学：9大学
どちらも言えないと回答した大学：10大学

どちらも言えないと回答した理由：人数的には満足しているが、女子があまり入ってくれなかったという意見が大多数を占めていた。他の意見として、今後に期待出来る可能性があるため、まだなんとも言えないという回答もあった。

『実績は漸減しているにも拘らず、「成功」と答える大学が多かったです。個人的にはもう少し、「自分のクラブを盛り上げる」事に貪欲になって欲しい、と思っておりますが...』

オリエンテーリングをどう説明したかについて

- ・北欧発祥のスポーツであること
- ・地図とコンパスを使って、森の中のコースに設置されている、チェックポイントを順番に回っていき、タイムを競うアウトドアスポーツであること
- ・大学生から始める人が多いこと
- ・体力に自信が無くても、頭で勝負できること
- ・定期的にオリエンをやる事で、良い健康を維持することが出来るということ
- ・各地で大会が行われているため、様々な所に行けるということ

などを組み合わせて、紹介していた。講習会や新歓説明会などを通して、まずは机上や口頭で説明し、その後、体験してもらうために練習会や新歓合宿を行っているクラブが多かった。

自分のクラブをどう紹介したか

(4の質問とかぶる部分があります
がご了承ください)

- ・ミーティングやトレーニング、大会への参加等、取り組み方は個人次第である
- ・強制は無く、サークル感覚である。
- ・オリエンテーリングを通じて、他大との交流がある。
- ・オリエンテーリングを通して、色々な所に行ける。
- ・オリエンテーリング以外にも、飲み会や食事会、大学祭等、様々なイベントを楽しむ事が出来る。
- ・アットホームな雰囲気、和気藹々活動をしている。

以上の点を強調してクラブの紹介を行っているようであった。殆どの大学はオリエンテーリングの競技性をよりも、オリエンテーリング以外の楽しいイベントに重点をおいているが、一部では競技性を全面に押し出している大学もあった。

今回の新歓の成功要因

o r 失敗要因

<成功要因>

- ・部の良い雰囲気を中心に押し出すことが出来た
- ・新歓に向けての準備を早期から始めた
- ・新入生と共に一緒に楽しむ事が出来た
- ・積極的にピラ配りや、声をかけて(強引な勧誘は×)アピールした
- ・数種類のピラを作成するなどして、ピラにも工夫を凝らした
- ・説明会を行う際に、写真を用いて視覚的にも楽しんでもらえるように配慮した
- ・練習会以外にもバーベキューや飲み会等、多くの新歓行事を催す事が出来た
- ・必ず誰かが部室にいるような状態を心がけた
- ・服装・言葉使いにも細心の注意を払った
- ・HPを充実させた
- ・最後まで諦めない事

<失敗要因>

- ・部の統率が取れていなかった
- ・予定していた新歓行事を中止してしまった
- ・新入生を魅了するイベントが少なかった
- ・新入生1人1人に対する配慮に欠け、完璧にフォローする事ができなかった
- ・雨天時の練習会時の準備不足、配慮

不足

- ・練習会、飲み会等において、上級生から新入生に声をかけることが少なく、上級生は仲の良い者同士で固まってしまって、新入生を無視してしまったこと

『自分は特にこの項に注目しました。特に失敗している大学には「準備不足」だとか「配慮不足」など新歓の運営の拙さが見て取れます。これに対し、成功している大学は早期から準備を始めて、活動に工夫を凝らしているところが多かったです。自分はこの結果や過去に集めたマニュアルを基に、「新歓活動のガイドライン」と言うべきものを作ろうかと考えています。』

その他気付いたこと

- ・オリエンテーリングの認知度が低いために、説明するのが難しく、またそのためか少々陰気なスポーツにとらわれがちであるため、イメージを改善していく必要がある
- ・ピラを受け取ってくれる新入生が少なくなったように感じられた
- ・競技性を全面に押し出さ無いように新歓活動を行ってきたため、実際にオリエンテーリングの過酷さを知った時、辞めてしまわないか心配である
- ・新入生は、同じ学科の先輩や自分の他にどれくらい新入生がいるかを気にする
- ・アルハラのポスターの影響はほぼ無いと言える
- ・女子大は多くの子がグループでやってくるため、辞める時は一気にいなくなる傾向がある

この他に、オリエンテーリングという競技の認知度が低いといった意見とは反対に、だんだんオリエンテーリングが普及してきたのではないかという意見もあった。また、幼少の頃に1度は経験した事がある人が結構多いようである

『オリエンテーリングの認知度もやはり重要な要素であると思います。正直なところ、現在のオリエンテーリング界は「オリエンテーリングの認知度を向上させる」事に成功を収めているとは言い難いと思います。特に学生クラブは一部を除き「普及」という観念はないと見て差し支えないでしょう。大学が主催する大会の目的に「オリエンテーリングの普及」がよく入りますが、これは悪い冗談だと言ってもあまり言い過ぎではないでしょう。自分は、学生クラブはもっと普及に熱心になるべきだ、と考えておりますが、このこ

とについては別の機会に述べたいと思います。』

日本学連、地区学連に望む事

大多数の大学が、無記入であったり、「特に無し」というものであった。この結果から、やはり各地区学連、及び日本学連と各大学とのキョリは遠く、なかなか双方に見えづらい関係であることが浮き彫りになったと言える。ただ一部から以下のような意見が記載されていたので、書き足していきます。

- ・学連の主催行事をもっと大々的に宣伝して欲しい
 - ・新歓イベントは1～2月中に決定して、4月に行ってほしい
 - ・ペアO.Lのようなセクション以外のイベントをもっと開いて欲しい
 - ・日本学連と関東学連の区別がややこしい
 - ・新歓のノウハウが書かれた冊子が欲しい
- とこんなところですよ。

『これはやはり、日本学連の広報のあり方を見直す必要が大いにあると思います。何もこれに限らず、学生クラブはオリエンテリング界全体に対する関心が低いのでは、と思ってしまいます。自分はこれに対する考え方等は持っておりますが、今回は割愛させていただきます。』

以上が集計結果です。期待以上に新勸実績と新勸のあり方の相関が得られて喜ばしい反面、「何で実際の新勸の流れを聞かなかったのだろう」と後悔もしております。ともあれ、このアンケートの全回答、アンケート結果の解析、その他の資料をつけた冊子を近いうちに発行したいとも考えております。このアンケートの結果が来年度以降の新勸活動に役立てば幸いです。最後に、アンケート回収を実施してくれた各地区学連幹事、アンケートの集計をしてくれた副幹事長、そして自分の愚にも付かない駄文を掲載して下さったO-magazineの編集部の方々に御礼申し上げます。

ローラースキー合宿 in 山形県民の森

(2002年7月20～21日)内山孝博

5月の蔵王残雪合宿に続き、Bjorn Gustavsson コーチのもと、総勢13名が参加し、気温30を超える猛暑の中、1泊2日のローラースキー合宿を開催。今回は、残雪合宿時に指摘された夏場のトレーニングの重要性を実践する形で、フット0山形場所に参加しながらの合宿となった。

【コーチ】Bjorn Gustavsson

【参加者】内山、賀彦、柴田、白鳥、酒井、山田一、荻田、安達、堀江、松橋、三澤、高橋美、大里

【場所】山形県民の森及び、協同の杜周辺農道

【トレーニングメニュー】

20日：pm、ローラースキーLSD、フット0参加

夜、ポールランニング、ナイト0参加

21日：am、フット0参加
pm、ローラースキーLSD

【7月20日、晴】

協同の杜で昼食を済ませた後、県民の森へ移動。早速、駐車場から道路へ出てみるが、斜度がきつく、ローラースキーには向かない為、緩やかな場所を求めて、大沼の西付近へ車で移動。ここをトレーニング場所にする。

各自滑り出したが、実際滑ってみると、結構アップダウンがあり、下りはスピードのコントロールが難しい。Gustavssonと安達は、その下りをものともせず滑っていくが、他の連中にはきつかった。案の定、転倒者が続出。初っ端としては、少し斜度がきつかった。各自、フット0のスタート時間に合わせ、スタート地点へ滑って降りていく。

フット0終了後は、森林展示館前のロータリーで各自ローラースキー自主トレを行い、Gustavsson からアドバイスを貰った。

夕食後は、ナイト0の前にポールランニング。場所は、県民の森内の、大沼北西の標高差140mの登山道。ピーク手前の急な坂を利用しダッシュ2本。ただ、19:00を過ぎると山の中は暗く、真っ暗の中でのトレーニングとなった。ナイト0参加者は、スタートに間に合うよう早めに切り上げ、ナイト0へ参加。宿舎に戻って、入浴後は、宴会。

【7月21日、晴】

午前、フット0。フット0後、ローラースキーを予定していたが、コースがタフで、ウィニング時間を大きくオーバーした為、午前は、フット0への参加のみとなった。

午後は、移動時間の節約と比較的フラットな場所を求め、宿舎である協同の杜周辺の農道にてトレーニング。農道は車がほとんど通らない緩い傾斜で、協同の杜の駐車場も広く、初心者を含むメンバーでは、最適なトレーニング場所となった。

夏の暑い陽射しの中、Gustavssonの個別アドバイスを受けながら黙々と滑る。フット0の運営を終えた武石さんも合流し、ローラースキーらしいトレーニングとなった。

ローラースキーは、舗装された路上で行う為、走法に限られ、スキーO独自の走法というよりは、クイック、スーパースケートやダブルポール等の基本走法が中心となり、フォームやバランスのチェックと、普段使用しない上半身の強化が主になる。

また、ローラースキーは、転倒すると怪我する危険が高いため、防具の着用をお勧めする。